



写真左から 2 番目東郷隆一総師範、今野龍彦刀剣研磨師(シアトル在住)、小生(末次毅行)



薬丸野太刀自顕流鹿児島本部と東京支部の師範及び門下生の演武

インタビュー“秋祭り”

薬丸野太刀自顕流保存会

2009年9月12日



パフォーマンス“秋祭”

薬丸野太刀自顕流保存会

2009年9月12日



薬丸野太刀自顕流鹿児島本部と東京支部の師範及び門下生の演武

インタビュー“秋祭り”

薬丸野太刀自顕流保存会

2009年9月12日



薬丸野太刀自顕流東郷隆一総師範の模範演武

パラビュ“秋祭り”

薬丸野太刀自顕流保存会

2009年9月12日



薬丸野太刀自顕流東郷隆一総師範の模範演武

ビデオ“秋祭り”

薬丸野太刀自顕流保存会

2009年9月12日



薬丸野太刀自顕流東郷隆一総師範の模範演武



薩摩藩示現流

示現流（じげんりゅう）とは、薩摩藩を中心に伝わった古流剣術。

流祖は東郷重位。

歴史

流祖の東郷重位は、元々はタイ捨流を学んでいたが、京都で善吉和尚より天真正自顕流を相伝し、両流派の利点を創意工夫した上で新流派を立てた。「示現流」という流派名は南浦文之による命名である。技術・系譜的には天真正自顕流の流れにあり、型ではタイ捨流を仮想敵としている。また、太刀流の伝承では、重位が近江浪人・田中雲右衛門より田中家伝来の早太刀の技を学んで技に加えたとされる。

重位は御前試合でタイ捨流の師範を破り島津家久の師範役となった。

2代目は重方が継ぎ、3代目重利までは藩内に多くの門弟を抱えていた。4代目実満（重治）は父の重利が中風をわずらったため直接に一子相伝を受けられず、高弟の伊集院久明（小示現流）を通じて相伝した。このためか実満は技量が十分ではなく、困窮して城下を離れて伊集院郷に逼塞した。さらに屋敷が火事になり伝来の文物を多く失ってしまう。またこのころ、示現流系でも東郷家から独立していた太刀流や古示現流（帆足流）が盛んとなっていた。こうした状況を憂えた示現流門弟たちは、実満を城下に呼び戻し、藩主への上覧も行つて東郷家の示現流を再興した。

実満の嫡子位照は技量優れていたが、継母との不仲により（事実は家督争いという）脱藩を企てたため廃嫡され、奄美大島に遠島になった。示現流は代わつて位照の子である東郷実昉（さねはる）が継ぐことになったものの、若年であったため、薬丸兼慶（東郷重位の高弟だった薬丸兼陳の養孫）が事実上の師範役となつ

た。実昉の成長をもって兼慶は師範役を降りたが、示現流門弟には実力があり本来宗家となるべきだった位照を支持する一派もあったようである。位照は貧窮のあまり町人に技を教えたり、実力者ですでに東郷家からは教授を受けていなかった薬丸兼富（兼慶の曾孫）や久保之英（「示現流聞書喫緊録」の著者）に無理矢理免状を発給するなどしていた。後に薬丸兼武（兼富の養子、久保之英の実子）はジゲン流あるいは如水伝を称して独立する（薬丸自顕流）。

このように江戸中期には衰退・混乱があったが、実昉の子、6代目実乙は流祖重位以来と言われるほどの達人で、示現流中興の祖となった。

その後幕末・明治維新・太平洋戦争で門弟の多くを失ったものの、現在も東郷家の手により鹿児島に伝承されている。

特徴

『一の太刀を疑わず』または『二の太刀要らず』と云われ、髪の毛一本でも早く打ち下ろせというほど初太刀から勝負の全てを掛けて斬りつける鋭い斬撃が特徴である。達人ともなれば、立木に打ち下ろすとき煙が出る。

稽古には柞（ゆす）の木で作った木刀を用い、蜻蛉（とんぼ）と呼ばれる構えから、立木に向かって「猿叫(えんきょう)」と呼ばれる独特の掛け声（気合）と共に左右激しく斬撃する『立木打ち』など、実戦を主眼に置いた稽古をひたすら反復する事に特徴がある。（小説や漫画で「チェスト！」と叫ぶ場面があるが、実際にはそうは言わない。）

幕末期の薩摩藩主、島津斉彬が示現流の稽古を見た際に、「まるで気が狂った輩の剣術だ」と評したと云われている。（ただし、これは島津斉興が薬丸自顕流を指した言葉とも言われる）

何時如何なる場面においても戦える「生活に根付いた実戦性」を追求しており、他流では流派規定の道着を着用しての稽古を求められるのが普通であるが、示現

流では何時でも敵と対峙出来る様、平服姿でも稽古に参加しても良いとされている。現代の生活状況に合わせてTシャツとジーンズ姿・あるいはスーツ姿と云う服装での稽古が容認されており、実際に立木打ちの際ではその姿で稽古する修行者も多い。(但し、公式な演武では和服での正装もしくは道着を着用している) 単純な内容に思われがちだが、一般に思われているより複雑に体系化されており、技の数も多く習得は容易ではない。そのため、下級武士は示現流より比較的単純な小示現流、太刀流や薬丸自顕流の方を学ぶ傾向があったというが、教授が上級武士に限られていたというのは誤解で、示現流の高弟の系譜を記した「示現流聞書喫緊録」には陪臣や足軽の名もあり、藩内に多くの流派があった幕末期には上級武士が学ぶ傾向があった、ということである。

幕末期、新撰組局長・近藤勇をして「薩摩者と勝負する時には初太刀を外せ」と言わしめたとされるのは、示現流及びその分派(示現流、太刀流、薬丸自顕流など)を指している。これらの薩摩の剣術は初太刀での一撃必殺を旨としており、受けることがほぼ不可能なためである。なまじの真剣でもへし折られてしまし、仮に折られなかったとしてもそのまま押し込まれてやられてしまう。実際、幕末期に示現流にやられた武士の中には、自分の刀の峰を頭に食い込ませて絶命したものが相当数いたことは有名な事実である。(ただし、薩摩藩の剣術は示現流系だけでなく直心影流や浅山一伝流もあり、それらを修行した薩摩藩士もいる)

薩摩藩の支配下にあった琉球王国にも薩摩藩士を通じて示現流剣術を学ぶ者がいたため、琉球の徒手武術である唐手の技法や思想に影響を与えたという説もある[要出典]。この説が正しければ、唐手は本土に伝えられ空手となった後も空手に先手無し、空手の技は一撃必殺を求めるべしと云われるのは、示現流の影響によるものと考えられる。